

11-2 会社も未経験なほど大規模なシステム開発！

～管理技術者としての初業務～

1. 立場と仕事

設計コンサルタント会社に入社して9年が経ち「技術士 情報」の資格を取得した頃に、会社はこれまで経験したことがないほど大規模なシステム開発案件を受注した。本案件は、道路工事の完成図書に含まれる図面のCADデータを一元集約するシステムを対象とした設計・開発業務であり、内容的にもそれまで会社も経験した事のない要求仕様も含まれている難易度の高いものであった。更に厳しいことに、工期は6ヶ月間という短期間であった。

システムの要求仕様に対応できる業務知識を有していたのが社内では自分以外にいなかったため、技術士資格取得直後で管理技術者経験はまだなかったが、業務知識を優先して管理技術者を拝命した。

2. 遭遇した事態

会社も本案件ほど大規模なシステム開発を扱ったことがなかったため、管理技術者としてまずは、本案件に対応できる高い能力を持つチームを組織して体制を整えることが急務であった。当時所属していた部署は極めて多忙であったため、拠点・オフィスの異なる他部署の人員も含めた複数のチームを編成することが不可欠であると判断していた。しかしながら、業務多忙な状況は他部署でも同じであり、チーム整備は難航していた。一方で、工期に全く余裕がない中、充実しているとは言い難い体制で、如何にして期限までに完成させるかという方策について、思い悩んだ。

3. 対応内容とその結果

状況を打開する方策として、まずは、当該システムに求められた要求仕様を紐解き、システム開発に向けてのタスクとして素早く整理・分類した。そのうえで可能な限りタスクを「細分化」し、各タスクに必要なスキルとマンパワーの明確化を行った。次に、社内外の様々なつてをたどって各タスクに必要なスキルを持つ人員の確保を図るとともに、優先度の高いタスク（後工程に影響の大きなタスク等）に注力して作業をスタートした。

作業を進める中で、拠点が異なる複数チームから各タスクの進捗・遅延・課題等をリアルタイムで管理技術者へ集約するように情報伝達をコントロールした。各タスク担当者が手待ち状態になって作業の手が止まらないようにマネジメントするよう心掛けた。作業中に発生した課題に対しては、いち早く対策を決断して、全体工程に与えるダメージを最小限に抑えるよう努めた。

また、発注者側も大規模システムの全容を把握・理解できていたわけではなかった状況において、上記のタスク細分化・情報伝達コントロール・課題発生とその対策などの全てを受発注者間で共有することで、工程の内容や進捗のみならず問題点に関しても認識を合わせることができた。これにより、受発注者が「一致団結」して開発を進めてゆく関係を築くことができ、本開発の強力な推進力となった。結果として、工期を遵守して高品質なシステムを開発することができた。